

多くの方々に昔からの伝統工芸と職人の良さを発信していきたい

七三人工房

古川 七三人さん



福岡県版「現代の名工」である、県優秀技能者に、大川市から三人が選ばれた。今月は、その一人、古川七三人さんにスポットを当てる。

古川さんは、県内でも数少ない、漆工芸技術者。乾漆を手がける。乾漆を作るには、まず、粘土で原型をつくり、石膏で型を取る必要がある。そしてその石膏の内側に、麻布を貼り、漆で塗り重ね乾燥したら、中の石膏を抜く方法である。制作に長い時間がかかる。奈良興福寺の十大弟子

像や阿修羅像など天平時代の仏像に多い。

古川さんが手がける、宝石のように美しい作品は、日展で六度入選するなど、多くの展示会で賞を受賞している。また中学の美術教科書にも登場している。赤、黒、黄色の美麗で深い色調が特色だ。

漆に携わるようになったきっかけは、二十代前半、勤めていた木工所が漆を扱うようになったことだ。会社が開いた漆の勉強会に参加するようになった。そして時を移さず、



テレビで女性作家が乾漆を造るのを見た。その乾漆は美しい光彩を放っていた。心奪われた。

以来四十年間、ほぼ独学で漆と格闘しながら、優れた作品を生み出す努力を続けてきた。「ウルシかぶれ」が長く続いたという。「爪が剥がれ、体中が腫れましたね。」といわれる。それでも続けてきたのは、「化学塗料では決して出せない、漆の圧倒的な美しさに魅了されていたからです。」それにもう一つ。「妻や子供たちが漆に強かったことです。症状が出ません。もし、そうでなければ続けてこれなかったでしょうね。(笑)」



「太陽は熱い」



「天に向かって」

一方、「師匠の作風や型に捕らわれないこと」で、自分が納得できるものを自由を追求できるのは喜びです。」とも話される。

手元にあった二つの作品を見せてもらった。どちらも日展入選作品。一つは「太陽は熱い」という作品。「山に挟まれた深い谷に立ち上る霧に朝焼けの光が当たる場面を表現してみました。朝焼けを表現するために、表面をでこぼこさせるのに苦心しました。自然な表現になるように柔らかいへらで漆を延ばす画期的な方法に挑戦しています。」深みのある色の濃淡と、描かれている景観は幻想的な雰囲気を与えている。

もう一つは、「天に向かって」。道が天に向かって、壮大なイメージの作品。球体を上から押しつぶしたような柔らかい丸い形状に、迫力ある情景が描かれた作品だ。日本間に飾ると、実に映えそうに壮麗さを感じる。

また、古川さんは乾漆工芸

作家としての側面だけでなく、一般消費者向けの製品も作っている。椅子、テーブル、筆筒など、木取りからデザイン、制作、完成まですべて一人で作りあげる。使う人の利便性と快適さに心を砕く。もちろん全部漆塗りである。見せてもらったが、どれも質感が素晴らしい、「本物」の家具。夢は何だろうか。「日本新工芸展で会員賞を受賞すること。そして日展入選十回を目指していますよ。(笑) これらは励みになりますからね。また伝統技法の後継者を大川で育成したいですね。私が開いている漆教室に、たくさん生徒

さんが集まればと願っています。漆職人の世界は、なにかと閉鎖的ですが、私は何でも喜んで教えます。今度ブログに制作過程を分かりやすく紹介する予定です。多くの方々に昔からの伝統工芸と職人の良さを発信していきたいですね。」



テーブルセット



ベッド

